

ニーチェの進化論批判

——器官の形成を巡って——

前 川 一 貴

はじめに

ニーチェ（1844–1900）がダーウィン（1809–1882）の『種の起源』（1859）を実際に読んでいたという確実な証拠はなく、彼の進化論受容は間接的なものだったと考えられる⁽¹⁾。ニーチェには生物学を専門的に研究した経験がないことも踏まえれば、彼が進化論をどこまで正確に理解していたのかについても定かではない。またニーチェの刊行された著作や遺稿において、進化論について議論している箇所は限られている。彼の思想においてこの問題は主要なテーマのひとつを成していたと言うことはできない。

しかし、ニーチェがキリスト教を批判した背景として、進化論が大きな影響を及ぼしていたことは無視できないであろう。突然変異と自然淘汰の繰り返しによって人間は動物から進化してきたというダーウィンの主張は、人間は神によって創造された被造物であるというキリスト教の信仰と相反する。デュージングの分析によれば、この相反する立場からニーチェは二つの大きな問題に直面することになったという⁽²⁾。一つ目は、道徳に関する問題である。キリスト教によれば、人間が動物とちがって利己的欲望を抑制できるのは、神が人間に理性を付与したからということになるが、人間が動物から進化してきたとすれば、人間も動物と同じように利己的欲望に突き動かされているだけなのではないかという疑念が生じる。二つ目は、世界全体の目的に関する問題である。神が世界を創造したというのであれば、この世界はある究極の目的に向かって進んでいるのだとも考えられるが、生命は突然変異と自然淘汰の繰り返しによって進化してきたとすれば、世界というのは各個体が自己保存を目的に争い合っているだけなのだとも思われる。つまりデュージングが考察するには、ニーチェは進化論の立場からキリスト教を批判したものの、それによって神の死、すなわちニヒリズムに陥ってしまったというのである。

ただし、ニーチェはその状態にとどまっていたわけではない。進化論がニヒリズムを引き起こしたのであれば、それを克服するためには進化論そのものを批判する必要がある。ニーチェは『偶像の黄昏』（1889）の「ある反時代者の遊撃」断章14で、次のように述べている。

反ダーウィン。——あの有名な「生存競争」に関して言えば、それはさしあたり私には証

明されているというより、むしろ主張されているように思われる。それは起こりはするが、しかし例外としてである。生の総体的光景は、窮乏状態、飢餓状態ではなく、むしろ豊富、豊満であり、ばからしいほどの浪費ですらある、——闘争がなされるとき、人は力を求めて闘争する…人はマルサスと自然を取り違えてはならない。(KSA, 6, S. 120⁽³⁾.)

ニーチェが指摘しているように、ダーウィンの進化論が議論の前提としてマルサスの人口論を取り入れていることは事実である⁽⁴⁾。マルサスが導き出した結論は、人口の増加は幾何級数的であるのに対して、生活資糧、とくに食糧の増加は算術級数的であるということである。ダーウィンはこの結論を社会のなかの人間だけでなく、自然のなかの動物にも応用している。つまり進化論においては、食糧が恒常的に不足している環境が前提になっていて、それゆえに各個体は自己の生存を目的に争い合わなければならないとされているのだ。しかしニーチェによれば、「生の総体的光景は、[…] むしろ豊富、豊満であり」、「闘争」が行われるのは力をめぐる「浪費」なのである。すなわち彼においては、各個体は自己の力の拡大を目的に争い合っているということが前提にされているのだ。

それでは、なぜニーチェはこのように進化論を批判しなけりばならなかったのか。私が着目したいのは、彼が器官の形成についてダーウィンとは異なる見解を示しているということだ。進化論に従えば、一方では突然変異によって、ある個体に異なる形態や機能をもつ器官が生じて、他方では自然淘汰によって、環境により適応した器官をもつ個体が生き残り、結果として器官の機能は漸進的に進化していく。ところが、ニーチェはこのような考え方では器官の形成について説明できない点があると考察しているのだ。私が明らかにしたいのは、ニーチェがこの点を切り口にして道徳および世界全体の目的に関して彼独自の議論を展開しようとしているということである。

1. 進化論の批判

器官というのは機械と同じように、何かしらの意図のもとある目的のために作り出されたかのように見える。しかし器官は機械とは異なって、人間が作り出したものではなく、自然と生み出されたものである。器官がきわめて精巧な仕組みをしていることを思えば、それは神のような人知を超えた力によって作り出されたのだと考えてみたくもなるだろう⁽⁵⁾。しかし進化論によれば、そのように器官が形成されたのは、長い年月をかけて突然変異と自然淘汰が繰り返された結果に過ぎない。突然変異とは、親の系統にはなかった新しい形質が突然生じ、それが遺伝していくことである。また自然淘汰とは、生物の生存競争において、少しでも有利な形質をもつ者が生存して子孫を残し、不利な形質をもつ者は滅びてしまうことである。進化論においてはこの突然変異と自然淘汰の繰り返しによって、器官は漸進的に進化していくと考えられている。

ダーウィンは生きた生物や化石を長年にわたって観察することで、このような進化の過程を明らかにしていった。ニーチェはこのように実証的な方法で取り組まれた進化論をどのように批判していたのだろうか。この理論の中心となっているのは、突然変異と自然淘汰という二つの観点である。そこでニーチェがそれぞれの観点についてどのように考察しているのかを分析していきたい。まずは自然淘汰についてである。ニーチェは1886年末から1887年春のあいだに書かれた遺稿断章7 [25]で、次のように述べている。

——「外的環境」の影響というのがダーウィン⁽⁶⁾においては馬鹿げたまでに過大評価されている。生の過程における本質的なものは、途方もない、形成する、内部から形態を創造する力であって、この力は「外的環境」を利用し尽くし、搾取するのだ… (KSA, 12, S. 304, 7 [25].)

ここでニーチェが批判しているのは、進化論においては環境的要因が重視され過ぎていくことだ。ダーウィンは食糧が恒常的に不足していることを前提にして、環境の条件によって進化するべき器官が決定されると考えてしまっているのである。それに対してニーチェは、むしろ重視すべきなのは身体的要因であると主張しているのだ。たしかに生物は異常繁殖して環境を破壊してしまう場合もある。この事実重点を置けば、淘汰される生物を決定するのは、食糧不足という環境的要因よりも自己増殖という身体的要因であるとも考えられる。つまり、食糧が足りないという状況は例外的であって、ほかの生物との個体数をめぐる争いのほうが恒常的なのではないかというわけだ。

ニーチェがこのように生物の淘汰において環境的な条件よりも身体の生命力を重視していることは、『善悪の彼岸』（1886）の断章13においても確かめられる。

自己保存の衝動を生物の中心的衝動として設定することについて、生理学者たちはよく考え直したほうがいい。生命あるものはとりわけ自己の力を発散させたがっているのだ——生そのものが力への意志なのである——。自己保存というのは、その間接的できわめてよく起る結果のひとつに過ぎない。(KSA, 5, S. 27.)

進化論においては、食糧が恒常的に不足している環境が前提になっていて、それゆえに個体は自己の生存を目的に争い合わなければならないとされている。しかしニーチェによれば、個体は自己の力の拡大を目的に争い合っていることが前提にされるべきなのである。つまり彼が主張するには、生物の行動の原動力となっているのは、自らの生命を危険に曝してでも、自己の力を拡大しようとする欲求なのだ。ニーチェはこれを「力への意志」と呼んでいる⁽⁷⁾。それに対して、

自己の生命を保とうとする欲求は「自己保存の衝動」と呼ばれている。この欲求は、自己の力の拡大が望めないほど自らの生命が衰弱している場合にしか生じず、「力への意志」が発揮できない例外的状態に過ぎないとされているのだ⁽⁸⁾。このように、ニーチェが器官の形成過程について論じる際に中心に据えていたのは、生物を突き動かしている原動力とは何なのかという問題だったとすることができる。

ニーチェが環境的要因よりも身体的要因に重きを置いているならば、彼が突然変異についてどのように考えていたのかについても議論しておく必要がある。ダーウィンは突然変異が生じることやその変異が少なくとも部分的には遺伝することは知っていたが、当然ながらそのような変異がどのように遺伝するのかというメカニズムについては知らなかった。このメカニズムが解明されるのは20世紀に入ってからである。遺伝学は1900年におけるメンデルの法則の再発見から出発し、1953年にはワトソンとクリックが遺伝子の本体はDNAであることを証明する。この分野が自然科学の一領域として機械論の立場を取っていることは言うまでもない。出来事の因果関係を分析してその出来事が生じるメカニズムを解明することこそ、自然科学の目的なのだ。しかし、ニーチェはこのような機械論的見方には明らかに否定的な態度を示している。『道徳の系譜』(1887)の第二論文、断章12では次のように述べられている。

この歴史的方法論の主要な観点[より力の強い者の「進歩」のために、多くの力の弱い者が犠牲にならなければならないということ]が、ちょうど流行している本能と時代趣味に根本的に逆らうものであるほど、私はますますこの主要な観点を強調する。これらの本能や時代趣味とくときは、あらゆる出来事のうちに生じている力への意志の理論よりもむしろ、あらゆる出来事の絶対的な偶然性、いやそれどころか機械論的な無意味性と妥協することを好む。(KSA, 5, S. 315⁽⁹⁾)

ニーチェがここまで「力への意志」に重要性を認めていることから、あくまでも彼の主要な関心は、身体メカニズムを観察して生物を突き動かしている原動力について解釈することにあると言える。事実、先に引用した『道徳の系譜』の断章12では、器官の形成について次のように考察されているのである。

したがってある事物、ある慣習、ある器官の「発達」というものは、一つの目標に向かっての〈進歩⁽¹⁰⁾〉なのでは決してなく、ましてや論理的かつ最短で、最小限の力と費用でもって達せられる〈進歩〉ではまったくない。——この「発達」というのは、多かれ少なかれ深部に達する、多かれ少なかれ相互に独立的な制圧過程であり、この制圧過程は事物や慣習や器官において生じるところのものだ。付け加えれば、今論じられている「発達」とは、この

制圧過程に対して毎回費やされる反抗、防御と反動を目的として試みられる形態変化、さらには成功した対抗反応の成果なのである。(KSA, 5, S. 314f.)

この箇所から、ニーチェにおいては諸部分の力をめぐる争いが、個体間だけでなく個体の内部においても生じていると捉えられていることが分かる。つまり彼の議論の重点は、食糧不足という環境的要因から自己の力の拡大という身体的要因に移り、さらにはこの力の拡大という性質は身体という個体ではなく、身体を構成する諸部分に帰せられているのである。以上、本節における分析から、ニーチェは器官の形成について環境の条件ではなく、身体の内部から議論していく方法を取っていたとすることができる。

2. 細胞学の応用

ニーチェの進化論批判において焦点になっているのは、生物を突き動かしている原動力についてどのように解釈すべきなのかという問題であった。そこでニーチェは進化論における「自己保存の衝動」を批判して、「力への意志」という独自の概念を打ち出していた。彼によれば、「自己保存」を生物の目的とすることは、食糧不足という環境的要因を前提にすることから帰結したものに過ぎなかった。そこでニーチェは自己の力の拡大という身体的要因を重視しなければならないと主張したのであった。しかし、このように「力への意志」を議論の前提として設定しなければならない必然性とは何なのであろうか。この問いについて議論するために、まずは『偶像の黄昏』の「ある反時代者の遊撃」断章14から引用したい。

——しかし、この闘争が起こるとすれば——そして事実、それは起こるのであるが——、残念ながらそれは、ダーウィン学派が願っているのとは、そして人がおそらくこの学派とともに願ってもよいと思っているのとは、逆の結果となる。すなわち、強者、特権者、幸福な例外者には不利となる。種属は完全性という状態においては成長しない。弱者が繰り返し強者を支配するのであり、——それは弱者が多数者であり、弱者がより伶俐であることを意味する… (KSA, 6, S. 120.)

この引用箇所では、ダーウィンの支持者は強者のほうが生き残っていくと考えているのに対して、ニーチェは「弱者」こそが「繰り返し強者を支配する」のだと主張している。ここだけでは強者と弱者の関係が逆転する理由についてははっきりしないが、ニーチェは強者のみが生き残るという見方に何かしらの問題点を見出していると言える。

ニーチェが『種の起源』を実際に読んでいたのかは分からないが、強者だけが生き残っていくとすると十分には説明できない点が生じてしまうことは、実はダーウィン自身も認めている。そ

の問題点とは、「それぞれの種の自然増加を抑制する働きがどのような原因によるのかは、まったく判然としない⁽¹¹⁾」ということだ。もし環境により適応した強者だけが生き残っていくとすれば、そのような強者が異常繁殖することになってしまう。このようにダーウィンは考えて、種の増加を抑制する働きの例をいくつか挙げてはいる。例えば、ほかの動物の餌食になること、厳寒や干ばつなど気候が変動すること、ある一つの種が狭い地域で異常に増えると伝染病が起きやすいことなどである。しかしどの例もある特定の時期や場所に限られてしまうもので、種の増加を持続的に抑える仕組みとしてどのような地域にでも適用できるというわけではない。ニーチェが弱者による強者の支配を主張したのは、ダーウィンと同じくこのような問題意識をもっていたからとは言えないだろうか。

そこで私が注目したいのは、ニーチェが細胞学者ルー（1850-1924）の著作『有機体における諸部分の闘争』（1881）に着目していることだ⁽¹²⁾。その著作が刊行されたのは1881年2月であり、ニーチェがルーの研究に関して評価している断章が、1881年春から秋にかけて書かれた遺稿のなかにある⁽¹³⁾。さらにこの著作はニーチェの蔵書として残されてもいる。これらの事実を踏まえると、彼はルーの『有機体における諸部分の闘争』が刊行されるとすぐに購入して、読了したと推測される⁽¹⁴⁾。そしてニーチェがこの書から強い影響を受けていたということは、1883年春から夏のあいだ書かれた遺稿断章7[190]において確認できる。

組織の闘争は各部分のあいだの平衡に行き着く。

あまりにも生命力が強い組織は、それが非常に有用であったとしても、全体を崩壊に導く。例えば、腫瘍はそのような異常な生命力を具えた組織である。それはほかの組織の栄養や場所を犠牲にして勢力を広げ、全体を破壊する。（KSA, 10, S. 302, 7[190].）

生理学者のルーは器官の形成に関して、生物学者であるダーウィンとは異なった見方に立っている。ルーが主題としているのは、外的環境における個体間の関係ではなく、身体内部における細胞間関係なのである⁽¹⁵⁾。この立場のちがいが両者の議論も異なってくる。ダーウィンにおいては食糧不足という環境的条件が前提になっているのに対して、ルーは細胞間の闘争という身体的条件を前提にしているのだ。どちらの前提が正しいのかをここで明確にすることはできないが、強者の増加を抑制する働きを分かりやすく説明できるのは、ルーのほうだと言うことができる。彼によれば、あまりにも強過ぎる者は全体を滅ぼして、結局のところ自己も滅んでしまうのである⁽¹⁶⁾。ニーチェがこの断章7[190]で述べているのは、このルーの見解にほかならない。

ルーがどのように身体的条件として細胞間の闘争を前提にしているとすれば、個々の細胞における環境的条件はどのようなものと捉えられるのか。ルーの見解では、各細胞が際限なく自己増殖を図るなかで、弱過ぎるものも淘汰されるが、強過ぎるものも全体を破壊して自滅し、結果と

して調和の取れた細胞同士が結合して器官が形成される。つまり個々の細胞にとっての環境的条件とは、おのれの外部にあらかじめ設定された確定的なものではなく、他者との関係のなかで作り上げていく変動的なものということになる。ニーチェは先の断章7 [190]でこれと同様の見解を示している。

組織のあいだの平衡が欠けると、その個体はたちまち死にいたり、この個体とその不利益な性質は生きている者の序列から除去される。平衡の状態のみが残る。逸脱した部分の自己除去によって組織体全体の調和的な統一が育成される。

もろもろの組織の闘争は、ある統制的な原理となる。合目的な全体の諸関係が機能的に自己形成するための原理である。(KSA, 10, S. 302f, 7[190].)

またルーによれば、脳が形成されるときもまた、器官同士が闘争し合った結果として、各器官は全体の調和を図るべく、相互の情報を集約して分配する器官、すなわち脳を生み出すという⁽¹⁷⁾。ニーチェはこのような脳の役割についてもルーの見解に従っていて、1884年夏から秋のあいだに書かれた遺稿断章26[36]では、「神経体系と脳は、さまざまな階級における無数の個体精神の管理装置および集中装置である⁽¹⁸⁾」と述べている。付け加えれば、ここでいう「個体」とは、ひとつの統一的な生命体を成している身体のことではなく、その身体を構成している無数の細胞や諸々の器官のことを指している。このようにニーチェは身体の形成に関して、ダーウィンの進化論ではなくルーの細胞学の立場を取っていたと考えられる。

ここで注目すべきなのは、ニーチェがこのようなルーの立場を取りつつ、人間の行為が引き起こされる仕組みについても議論を行っていることである。1884年夏から秋のあいだに書かれた遺稿断章27[21]において、ニーチェは次のように考察している。

——何と速くそれは行われることか——というのは、例えば足を踏み外したとき、その反応行動は意識からの意志行為の結果としてようやく生じ、そしてあらゆる個々の命令を決定しなければならず、——それから運動の順序がまったく逆の順番で起きるのである！(KSA, 11, S. 280, 27[21].)

この箇所ではニーチェは、足を踏み外したときの対応という単純な行為においてさえ、それを引き起こす身体の生理学的メカニズムはきわめて複雑であることに注意を促している。それによってニーチェが問いかけているのは、果たして脳が唯一の指令器官としてトップダウンで身体のすみずみにまで命令を下すことは可能なのかということだ。この断章27[21]と同じ時期に書かれた断章27[19]では、この疑念をもとに次のような考察がなされている。

事実として実行には無数の個体が必要であって、このすべての個体は、命令を与えられたときには、あるまったき特定の状態で控えていなければならない——これらの個体は命令を理解しなければならないのである、それに際する各自の特殊な課題も含めて。つまり絶えず新しく最末端にいたるまで命令され、(従われ)ねばならないのである。それからやっと、その命令が無数の下位命令にまで分解されると、運動が生じ得る。そしてその運動は最末端の最小の服従者から始まる——すなわち逆転が生じるのである。(KSA, 11, S. 279, 27[19].)

この引用箇所できくに着目したいのが、身体を構成する無数の「個体」は、脳から下される命令に対して「あるまったき特定の状態で控えていなければならない」という一文である。この一文でニーチェが示唆していることを明らかにするため、この断章27[19]から次の箇所を引用したい。

ここで前提にされているのは、有機体全体が思考すること、あらゆる有機的構成物が思考、感覚、意欲に関与していること——したがって脳は巨大な集中装置に過ぎないということである。(KSA, 11, S. 279f, 27[19].)

ここでニーチェは、脳だけが思考するのではなく、身体のあるあらゆる部分が「思考、感覚、意欲に関与している」と述べている。ここから分かるのは、彼において「身体を構成する無数の個体」は、本来的に脳から自律して機能していると捉えられているということだ。これを踏まえてその「無数の個体」が「あるまったき状態で控えている」という箇所を解釈すれば、この箇所は、身体における無数の細胞や諸々の器官が脳からどのような命令が下されるのかすでに承知していることを表していると考えられる。すなわち、たしかに形式的には命令は脳から下されているものの、実質的にはその命令は無数の細胞や諸々の器官で出された決定を反映しているに過ぎないというわけだ。

このように、ニーチェは身体の形成される過程を行為の決定される過程に準えていて、身体は部分同士の「闘争」によって諸部分の力関係が調整されたときに形成されるように、行為もまた同様の過程を経て生起すると考察しているのである。以上、本節における分析から、ニーチェは器官の形成に関して細胞学の立場から考察を試みることで、身体の形成と同じく行為の決定もまた、脳からのトップダウンではなく、細胞からのボトムアップによって可能になっているという見解にいたったとすることができる。

3. 細胞ベースの道德論

本稿における分析から明らかになったのは、ニーチェは器官の形成についてダーウィンの進化

論よりも、むしろルーの細胞学に注目しているということである。それでは、ニーチェはこのような進化論に対する批判を突破口にして、道徳の成立および世界全体の目的に関してどのような見解を示そうとしているのだろうか。

まずニーチェは細胞学者ルーの立場を取ることで、個体という概念について進化論の立場とは異なった見方をしていると言える。一般的に考えれば進化論においては、身体外部の環境下における個体間の関係を問題にしているのが、ひとつの個体はたんに自己保存を目的に生存しているということになろう。しかし細胞学者ルーの議論は、身体内部の組織上における細胞間の関係を問題にしているのが、ひとつの細胞がたんに自己増殖を目的に活動しているということになる。つまりニーチェにおいて個体というのは、ひとつの身体における「自己保存の衝動」を原動力とする単体なのではなく、無数の細胞における「力への意志」の関係から成り立っている複合体なのである。そしてニーチェが考える「身体」というのは、そのような細胞の「力への意志」が「闘争」を続けることで、脳におけるひとつの意志に集約されていくというボトムアップ式の階層を成しているのである。

ここで問題となるのは、このような細胞間の「自己調整」がひとつの個体にもたらす結果というのが、ほかの個体にとって利己的なものに過ぎないのか、それとも利他的に働くものなのかということである。1883年冬から1884年のあいだに書かれた遺稿断章24[16]において、ニーチェは次のように述べている。

簡潔に言えば、精神の発展全体に際して、おそらく問題なのは身体である。それは、ひとつのより高度な身体が形成されることについて感じ取れるようになる歴史である。有機体はまだ高い段階へと上がっていく。自然の認識に対するわれわれの欲望は、身体が自らを完成するための手段である。あるいはむしろ、養分摂取や住む仕方や身体の生き方を変えようとする何十万の実験がなされるのである。身体の中にある意識と価値評価、あらゆる種類の快と不快は、この変化と実験の徴候である。結局のところ、人間はまったく問題ではない。人間は超克されるべきなのだ。(KSA, 10, S. 655f, 24[16].)

この引用箇所における「身体」が有機体を構成している無数の細胞を表わしているとすれば、「高度な身体」とは、単細胞生物という下等生物に対して多細胞生物という高等生物の有機組織を示していると解釈できる。また、このような「身体」を形成しようとする「何十万の実験」の「変化」と「徴候」として、「身体の中にある意識と価値評価、あらゆる種類の快と不快」が挙げられているが、この「快と不快」という感情には、対象となる事物がおのれにとって利するものであるのかという「価値評価」がすでに含まれていると解釈できる。これらの「高度な身体」と「快と不快」についての解釈を踏まえれば、ニーチェは細胞同士の「闘争」という「自己調整」原理

に重点を置くことで、新たな「身体」を形成しようとする試みが人間の「価値評価」を決定していると考えようとしたと言えないだろうか。つまりニーチェは細胞学の知見をもとにひとつひとつの細胞に「力への意志」を認めることで、新たに「われわれの価値評価の由来⁽¹⁹⁾」について問い直そうとしていたとは考えられないか。

このようにニーチェが生理学の知見を積極的に応用していたという見方には、これまでの先行研究では否定的な立場を取っているものが多い⁽²⁰⁾。その代表的な人物としてハイデガー（1889-1976）の名前を挙げることができる。彼はナチス支配下の時代に行った『ニーチェ』講義（1961刊行）のなかで、「われわれの価値評価の由来」を形而上学の問題として捉えている⁽²¹⁾。

ニーチェはたいいてい道德を、超感性界が基準的で、望ましいものとして定立されるような価値評価の体系と理解している。ニーチェは「道德」をいつも「形而上学的」に、すなわちそのなかで存在者の全体について決定されることを顧慮したうえで、把握している。（NII, S. 103.⁽²²⁾）

感性界とは、人間に経験されている世界、私たちが生きている世界のことであるのに対して、超感性界とは、感性界を超えたところに存しているとされる世界、私たちには知り得ない世界である。ハイデガーによれば、ニーチェが道德について論じるときに問題にしているのは、感性界において何が善で何が悪かということではなく、そのように善悪を決定できる根拠とは何かということだ。その根拠として超感性界に至高の価値を指し、感性界ではその価値に従って善悪を判断すべきだという見方があるが、ハイデガーはニーチェが批判しているのはそのような見方だとする。ニーチェは、超感性界というのは人間が作り出した虚構に過ぎず、感性界こそが唯一の現実であると主張したというのだ。だが超感性界という至高の価値が廃れてしまうことで、人間は行為を決定する際に頼るべき規範を失ってしまう。そこでハイデガーが考察するには、ニーチェの哲学において問われているのは、人間が価値を決定する際、その価値を決定する原動力とは一体何かということなのだ。ハイデガーはこの問いに「力への意志は「新たな価値定立の原理」である⁽²³⁾」と答えるのだが、そのときニーチェにおいてこの「力への意志」はニヒリズムを克服するための本質的な力として指定されているというのである。

ただしハイデガーによれば、この「力への意志」には、超感性界のように追求すべき真理や服従すべき価値観があらかじめ設定されているわけではない。彼は同じく『ニーチェ』講義で次のように述べているのである。

この無=目標性は、力の形而上学的本質に属している。ここでもなお目標という言葉を用いるならば、この「目標」は、人間の無条件的な地球支配の無目標性である。（NII, S. 109.）

「力」というのは、何か具体的な目標があるわけでもなく、ただ自らの規模を増大しようとする。つまり「力への意志」とは、主体がこのような「力」を対象として捉えることであると同時に、この「力」そのものが主体として際限なくおのれの支配権を拡大しようとすることでもあるのだ。ハイデガーはこのような「力への意志」の解釈にもとづいて、ニーチェの「超人」という概念についても次のように定義している。

この者〔従来の間人〕は、自分を「越えた」ところになお理想や望ましいものを必要とし、求める。それに反して超人は、これらの「超越」や「彼岸」をもはや必要としない。なぜなら彼はただ人間自身のみを意志するからであり、しかもある特殊な観点からではなく、この地球において完全に開発された権力手段でもって無条件に力を行行使する主人として、もっぱら意志するのである。(NII, S. 110⁽²⁴⁾.)

このようにハイデガーの解釈では、ニーチェの道徳批判は主体による対象の支配の絶対化へと帰結してしまう。しかしそれは、ハイデガーがニーチェの哲学を形而上学的なものとして位置付けて、彼の哲学に生理学の知見が応用されている可能性を否定してしまっているからではないだろうか。このようなハイデガーの見方が早計であることを示すために、ニーチェが『道徳の系譜』(1887)の第一論文の最後に付せた注を取り上げてみたい。

——他面においては、もちろんこの問題（これまでの価値評価の価値について）に対して、生理学者や医学者の協力を得るということも同様に必要である。その際、これらの個々の場合において代弁者や仲介者の役をつとめることは、さすがに専門の哲学者に任せてもよいであろう。ただしそれは、哲学と生理学と医学とのあいだのもともと大変に拒否的で不信感の強い関係を、きわめて親密で実り多い交流に改めることに、その専門の哲学者たちが全体として成功したあとの話しである。(KSA, 5, S. 289.)

『道徳の系譜』の第一論文では、「善い (gut)」と「悪い (böse)」そして「良い (gut)」と「劣る (schlecht)」という概念の成り立ちについて論じられている。ニーチェによれば、貴族あるいはそれに類する人間においては、「gut」という概念は「劣る (schlecht)」の対義語として力の差を表すものとして考えられている。それに対して奴隷あるいはそれに類する人間にとっては、この「gut」という概念は「悪い (böse)」という概念の対義語として良心の有無を表すものと考えられている。そしてこのように「gut」という概念を「良い」から「善い」という意味に置き換えるのは、弱者がルサンチマンから強者を非難して、その強者を権力ある立場から引きずりおろ

すための策略に過ぎない、とニーチェは批判するのである。

ニーチェがこの第一論文の最後に付せられた注で呼びかけているのは、„gut“ や „schlecht“ や „böse“ といった「これまでの価値評価の価値」を明確にするためには、「生理学者や医学者の協力を得る」のも必要だということである。この箇所だけを読むと、人間の利他的な価値観はもともとは利己的な欲求から生み出されたに過ぎないという主張を、機械論的な見地から身体のカニズムを解明することで証明せよと要求しているだけのようにも思える。たしかにニーチェは、人間が道徳的な行為に踏み切れるのは超感性界からそうするように働きかけられているからだという立場を強く否定している。そこで彼は人間の利己的な性格の根拠を身体に求めるのであるが、それだからとはいえ、彼の哲学が機械論的な方法でもって説明され得るものだとすれば、それもまたニーチェが強く拒否したことであるのは疑い得ない。

この矛盾を解決するにあたって、本稿においてこれまで分析してきたことが重要な役割を果たすのではないか。ニーチェは身体の仕事に関して考察するとき、19世紀の細胞学の知見にもとづいて、機械論ではなく道徳論という観点から議論を行っているのである。1885年6月から7月にかけて書かれた遺稿の断章37[4]では、このようなニーチェの立場がより鮮明に打ち出されている。

道徳と生理学。——ほかでもない人間の意識がとて長い間有機的発展の最高の段階、この世のあらゆるものの中で最も驚嘆すべきもの、そればかりか、いわばそれらの精華であり目標であるとみなされてきたことを、われわれは軽率なことと考える。むしろもっと驚嘆に値するのは身体なのだ。どのようにして人間の身体が可能になったのかということ、それぞれが依存し、臣従し、しかもある意味では逆に命令し、自らの意志で行動しながら、どのようにして諸生命体のこれほど途方もない統合体が、全体として生き、成長し、そしてしばらくのあいだ存在し続けられるのかということ、このようなことはどんなに驚いても驚き切れないことなのである。——しかもこれは明らかに意識によるわけではないのだ。(KSA, 11, S. 576, 37[4].)

この箇所から言えるのは、ニーチェは身体の仕事における「途方もない統合体」に驚嘆の念を抱いているということである。そして彼においてこの「統合体」は細胞同士の「闘争」によって成り立っていると考えられていることは、この断章37[4]で「身体」という語がどのように定義されているのかを確認すれば明らかである。

しかもわれわれの身体を構成しているあの最小の生命体（より正しくは、これらの作用連関を表している最良の比喩が、われわれが「身体」と名付けているものである——）はまた、

われわれには魂 - 原子などではなく、むしろ成長し、闘い、自己増殖し、再び死滅するものとみなされている。(KSA, 11, S. 577, 37[4].)

この箇所に従えば、ニーチェにおける「身体」という語は、ドイツ語原文で引用符なしで使用されている場合（拙訳では鉤括弧なし）は物質的な肉体を指すのに対して、引用符付きの場合（拙訳では鉤括弧付き）は細胞の関係性を表していると言うことができる。例えば同断章37[4]では、「この「身体」という全体現象は、知的な度合いから言っても、われわれの意識、われわれの「精神」、われわれの意識的な思考や感情や意志よりも、代数学が九九よりもそうであるように優れているのである⁽²⁶⁾」と述べられている。ここでいう引用符付きの「身体」とは、われわれに意識されている「思考や感情や意志」に対して、われわれには意識されない無数の細胞における「力への意志」の「作用連関」を表していると考えられる。

ここで強調したいのは、ニーチェが「これはただし道德の問題であつて、機械論の問題ではないのだ！⁽²⁷⁾」とはっきり断っていることである。先の断章37[4]では、「「統一」や「魂」や「人格」についてたわごとを言うことをわれわれはもうやめている⁽²⁸⁾」と述べられている。ここでいう「人格」とは、感性界に住む人間の「魂」に具わる能力であり、なおかつ超感性界を至高の価値と定めてその価値に服従できる能力を表しているとすれば、ニーチェがこの「人格」を徹底的に批判していたのは明らかである⁽²⁹⁾。そして私の見解では、ニーチェはそこから主体による対象の支配を絶対化する「力への意志」の形而上学に向かうのではなく、細胞学の知見をもとに新たな道德論を展開しようとしているのだ。つまりニーチェにおいて人間は、超感性界と通じる「人格」的な「統一」体ではなく、無数の細胞における「力への意志」の複合体として考えられているのである。

ニーチェによれば、この「力への意志」は単体としては自己増殖という単純で利己的な行動しか取らなかった。単細胞生物のような下等生物であれば、その行動は利己的な傾向をもち、同じ行為を繰り返す反復的な性質を帯びることになる。そのような生物がほかの生物と協調的な関係にあるとしても、それは個体同士の「闘争」から生じた結果論に過ぎないのだった。しかしニーチェは「力への意志」を複合体として捉えていた。多細胞生物のような高等生物になれば、身体の仕組みは複雑になっていく。このような生物は一つの個体として外部の個体と「闘争」するだけではなく、個体の内部において無数の細胞同士による「闘争」が行われていた。この「闘争」という自己調整原理によって、多細胞生物の行動には利己的なだけでなく利他的な傾向も出てくるようになり、また状況に応じて振る舞いを変える可塑的な性質も現れるのではないか。

以上、本稿における分析から、ニーチェが考える生物全体の関係性とは、諸部分の「闘争」による「自己調整」という動的メカニズムが、個体間においても個体内部においても働いている入れ子構造を成していると言うことができる。このように細胞学と道德を融合させる試みは、道德

について人間ベースではなく細胞ベースで議論してみるという企てであり、人間を自然の一部として捉えることで新たな道徳論を切り拓くというニーチェの果敢な挑戦だったのではないだろうか。

注

- (1) Giuliano Campioni, u.a. (Hrsg.): *Nietzsches persönliche Bibliothek*. Berlin/New York: Gruyter 2003. Luca Crescenzi: Verzeichnis der von Nietzsche aus der Universitätsbibliothek in Basel entliehenen Bücher (1869-1879). In: *Nietzsche-Studien*, Bd. 23 (1994), S. 388-442.
- (2) Edith Düsing: *Nietzsches Denkweg. Theologie-Darwinismus-Nihilismus*. München: Fink, 2. Aufl., 2007, S. 544-549.
- (3) 本稿で使用したニーチェ全集の略記号は次のとおりである。KSA: Friedrich Nietzsche: *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe*, 15 Bde., hrsg. von Giorgio Colli u. Mazzino Montinari. München: Gruyter/dtv 1980. Neuauflg., 1999. 参照指示は、全集の略記号、巻数、頁数の順で示す。なお遺稿の場合は断章番号も付す。
- (4) Ernst Mayr: *Evolution und die Vielfalt des Lebens*. Berlin/Heidelberg: Springer 1979, S. 148.
- (5) 哲学史上の器官の形成をめぐる議論は、宮元和吉の『岩波講座哲学第6巻 目的論』（岩波書店、1932年）を参照。
- (6) 原文ではDと書かれ、編者によってD (arwin) と補われている。
- (7) 『ツァラトゥストラ』（1883-1885）の第二部における「自己超克について」も参照（KSA, 4, S. 146ff.）。
- (8) Vgl. KSA, 6, S. 291ff.
- (9) [] 内は引用者による補足。
- (10) 原文では progressus というラテン語。
- (11) Charles Darwin: *The Origin of Species*, hrsg. von Paul H. Barrett u. R. B. Freeman. London: Pickering 1988, S. 55-58.
- (12) Wilhelm Roux: *Der Kampf der Teile im Organismus. Ein Beitrag zur Vervollständigung der mechanischen Zweckmäßigkeitstheorie*. Leipzig: VDM 2007. [Leipzig: Engelmann 1881.]
- (13) Wolfgang Müller-Lauter: Der Organismus als innerer Kampf. Der Einfluss von Wilhelm von Roux auf Friedrich Nietzsche. In: Ders.: *Nietzsche-Interpretationen*, Bd. 1, Berlin/New York: Gruyter 1999, S. 101.
- (14) Ebd.
- (15) Ebd., S. 111ff.
- (16) Ebd.
- (17) Ebd., S. 126ff.
- (18) KSA, 11, S. 157, 26[36].
- (19) KSA, 10, S. 653, 24[16].
- (20) Martin Heidegger: *Nietzsche*, 2 Bde., Stuttgart: Neske 1961, 6. Aufl., 1998, S. 41f. Karl Jaspers: *Nietzsche. Einführung in das Verständnis seines Philosophierens*. Berlin: Gruyter 4. Aufl., 1981, S. 314 Anm. 1. Bernhard Lypp: Dionysisch-apolinisch: ein unhaltbarer Gegensatz. Nietzsches ‚Physiologie‘ der Kunst als Version ‚dionysischen‘ Philosophierens. In: *Nietzsche-Studien*, Bd. 13 (1984), S. 356-373. Helmut Pfotenhauer: Physiologie der Kunst als Kunst der Physiologie? Überlegungen zur literalischen und mythologischen Faktur der Texte. In: *Nietzsche-Studien*, Bd. 13 (1984), S. 399-411. Gerhardt Volker: Von der ästhetischen Metaphysik zur Physiologie der Kunst. In: *Nietzsche-Studien*, Bd. 13 (1984), S. 374-393.
- (21) 本稿で使用したハイデガールの『ニーチェ』講義の底本については、注19を参照。

- (22) この著作の略記号は次のとおりである。N: Martin Heidegger: *Nietzsche*. 参照指示は、著作名の略記号に続いて巻数をローマ数字で表わしたあと、頁数を付す。
- (23) NII, S. 109.
- (24) [] 内は引用者による補足。
- (25) KSA, 5, S. 289.
- (26) KSA, 11, S. 577, 37[4].
- (27) Ebd.
- (28) Ebd.
- (29) ニーチェは「魂」、「人格」という用語を挙げる際に、カント（1724–1804）の『実践理性批判』（1788）を念頭に置いていると考えられる。